

「いたら手合わせしたいくらいよ。そもそも武士の魂である刀を売るだなんて」

少し憤慨気味に、妖夢は立ちあがり、服についたホコリをはたき落とす。

「うーん、だったら何を当たるか。はつきりしない相手を探すのは面倒ね」

もう用も無いので、次の目的地に向かおうと、私は踵を返した。ここでもう何も起こる筈は無いのだけれど、今日はちよつとだけ事情が違ったみたいだ。

「待つて」

声を掛けた妖夢に、私は本当に面倒くさそうに振り向いたのだろう。振り返った私の目には、言うんじやなかった、そんな表情をした妖夢が映った。

「何よ？」

「霊夢が探している刀を売る奴に、少し興味があるのよ。もしかしたら剣の腕が立つのかもしれない」

「で？」

「だから、探すのを手伝おうかと……どう？」

うん、予想外だった。

まさか妖夢から手伝いたいなんて言い出すなんて思いもなかったからだ。それに大体私の異変調査(今回は少し違う)には途中で誰かが仲間になる、なんて事は無い。そもそも弾幕ごっこでコテンパンに打ちのめした方も、やられた方も、お互いに協力しようなんて事は普通思わない。

妖夢だって、いくら接戦気味だったとはいえ、負けた悔しさもある筈。

それでも提案してきた、つまり妖夢はこの件の話